〔書　評〕

『国語語彙の史的研究』

佐藤亨著

神谷かをる

1

目次の概略は次のとおりである。

序論
第一章　日本語の語彙体系と漢語・漢字
はじめに
日本語の語彙体系と語種構造
「兄弟」（人間活動の主体）
「証明・裏付け」（人間活動―精神および行為）
「におい」（自然物および自然現象）
「はちゅう類」（自然物および自然現象）
日本語の語彙と漢語
日本語の語彙と漢字
上代語論
第二章　上代・中古における親族語彙――オトコ（男）・オンナ（女）、オットヅマ（夫）・ツマ（妻）を中心に――
はじめに
オトコ（男）・オンナ（女）をあらわす語彙
オット（夫）・ツマ（妻）をあらわす語彙
第三章　古代文芸における「花」の語彙とその表現
中古語論
第四章　『日本霊異記』と『新撰字鏡』の和訓
訓釈の標出字および和訓が『新撰字鏡』のそれと一致するもの
標出字は同一であるが、和訓の音仮名が異なるもの
標出字は同一であるが、和訓が異なるもの
第五章　『日本霊異記』と『新撰字鏡』――訓釈を中心に――
義注が一致する例
共に義注で、意味が類似している例
和訓に対する義注
第六章　『日本霊異記』（巻上）の訓釈にみられる和訓の性格

標出字および和訓が『新撰字鏡』と一致する場合
標出字は同一であるが、和訓の音仮名が『新撰字鏡』と異なる場合
標出字が同一であるものの和訓が異なる場合
第七章　『日本霊異記』(巻上)の訓釈にみられる和訓の性格(二)
標出字が異なる場合の和訓
その他の和訓
二合訓
標出字は同一であるが、『日本霊異記』の和訓に対し、『新撰字鏡』では義注の場合
第八章　『日本霊異記』(巻上)の訓釈にみられる和訓の性格(三)
天治本『新撰字鏡』に掲出されていない和訓
漢文訓読語と考えられる和訓
『日本霊異記』の和訓が古語と考えられる語
第九章　『源氏物語』の語彙の造語性について——複合語・派生語を中心に——
『源氏物語』での複合語・派生語が現代語より多い例
『源氏物語』での複合語・派生語より現代語に多い例
両者の複合語などがほぼ同数の例
『源氏物語』に複合語があるが、現代語にない語
複合語・派生語が共にない語
第十章　『源氏物語』における仏教語——「宿世」とその周辺の語——
語誌・方言論
第十一章　上代・中古の「愛」「恋」とその類義語
第十二章　中世・近世における「愛」「恋」とその類義語
第十三章　明治期の「愛」「恋」とその類義語
第十四章　方言の語彙構造と語彙の性格——『岩手方言集』における「旧南部方言」を中心に——

以上のごときである。これは目次の細部は省略している。目次のみで九頁もとっておられて、内容や方法がある程度察せられる。このことからも分かるように、細かく親切なお仕事であることは、全編にいえる傾向である。

2

筆者(私)の専門は平安時代の言葉と表現であり、この著者と同年に『古今和歌集用語の語彙的研究』(和泉書院)を出版したので、佐藤氏の書評を頼まれたと思われるが、筆者は、佐藤氏と異なって、平安時代、それも源氏物語の頃までの文学語彙に限って関心がある。ゆえに、筆者に書評の資格があるのか否か分からないが、関心の範囲の重なる箇所を中心に述べざるをえない。佐藤氏は、これまで、近世語彙の研究をされ、評価を得られ、さらに、近代語彙にも及ばれた。私は、そのあたりには、趣味的に関心はあっても、厳密には門外漢といってもよいくらいである。だから、そのあたりのことは白紙にして、この著書のみを読んでみた。

まず、自分の能力範囲を述べることを許されたい。私は平安時

代といっても、古今和歌集の頃から源氏物語の頃までに関心がある。その間には語彙も表現も歴史的に変化をしているのではあるが、文章についてはその変化に興味があった。語彙としては、古今和歌集に今のところ興味があり、その語彙がいかに仮名文学に影響を与えたかについては関心があるものの、まだ参考程度にしか調査もできていない。即ち、語彙に関しては、通時よりも共時に関心がある。むろん両者は分かちがたく、特に古今和歌集の語彙は、歌語か否かという面に焦点がゆくので、それは、資料的に、仮名文学の語彙と比較対照せねばならず、方法上も切り離せないのはいうまでもない。その点で、佐藤氏は、方法上、通時というよりも、共時の積み重ねで通時的史的研究にもっていかれる傾向があり、私はまず方法上大いに納得できた。語彙史研究が、いかなるものかは、ここで論じる資格がないが、一つの語や語彙を単に時代毎に作品を追ってゆくことの難しさを感じて来た。まず、共時的に概観し、その中でその語や語彙を押さえる必要があると思う。それだけでも大変なことで、私は、古今和歌集から源氏物語までの語彙だけでもまだ概観もできていない。しかし、それを力説すれば、語彙史は研究対象外になってしまう。どこで折り合うかである。それは、語により、語彙により異なろう。

氏は、通時・共時よりも、語彙に体系があるか否かから説き始めている。第一章で、語彙の体系は、しかし捕らえにくく、「語彙の部分体系について考察し、それを積み重ねていく方法をとらざるをえない」と述べておられる。この態度は、通時・共時に対する氏の態度でもあろうと拝察する。第一章「日本語の語彙体系と漢語・漢字」においては、豊かな教養に基づいて常識的な見解をまとめておられる。

第二章では、「上代・中古における親族語彙――オトコ(男)・オンナ(女)、オット(夫)・ツマ(妻)を中心に――」を中心に論じる。ヒト(人)から始まって男女で分類し、表示もして整理され、分かりやすくされた。ただオトコ・オンナを親族語彙にしておられるが、単に性別を示す場合もあろうから、どんな場合に親族語彙か否かについても論じてほしかった。筆者も源氏物語の親族呼称について調査したことがあるが、語彙と呼称との関係も知りたいところである。さらに、単純でない問題もはらむことに対する配慮も必要であろう。例えば、伊勢物語の「おとこ・おんな」などは、清水好子氏の説や橋本四郎氏の説[注1]など、その分野に造詣の深い方々の説との関係にも深めてほしいものである。個々の作品の特色なのか、その時代のある程度（作品が限られるので）の普遍性があることなのかなど、考慮し始めるとなかなか単純にはまとめにくいと思う。著者が「和歌の中に」とか「古語的」として説明されているのは、歌語や歌ことばと関係することであろう。位相の問題も知りたいところである。

第三章では、「古代文芸における「花」の語彙とその表現」を扱う。私自身も花に興味を持ち、古今集になぜ桃が出現しないのかということを考えたことがあった。佐藤氏が花について「言語の観点からの研究は少ない」と述べられるように、今後は文学でな

い面からの考察が待たれるが、文学の方々の研究以上に至るには、かなり文学をきめ細かく理解しなければなるまい。奈良時代に多い語彙、平安時代に多い語彙、両者ほぼ同数の語彙など分けつつ述べておられるが、特別に新しいことは述べられていない。文学の方々からみれば物足りないかもしれない。例えば、「平安時代は花を女性美の表現に、直接的にせよ間接的にせよ用いることはない」と書かれているが、源氏物語では、女性を「夕顔・紫・朝顔」などに関係させていて[注2]（後の読者がつけた名前は別にしても）、筆者がなぜこういうのか、何か理由があるのかと思うが、述べられていない。国語学は文学と比較すると、言語のパロールよりもランを目指すことが多かろうが、文学作品を中心に扱う場合はそれだけに、文学に深い造詣が必要である。その上で国語学的に扱うべきで、そうでないと文学の方々にものたりないであろう。

第九章では、「『源氏物語』の語彙の造語性について――複合語・派生語を中心に――」について述べられている。使用度数一〇〇〇以上（言う　思う　もの等）、九九九～五〇〇（聞く　今　身等）、一九九～一〇〇（劣る　頼む　顔等）、九九～五〇（恨み　住む　作る等）までの語彙で分け、現代語と比較し、どちらが多いか少ないかを見つつ、語彙構造・造語能力の実態を明らかにしようとされる。着想は大胆で面白いが、源氏物語と現代の辞書というジャンルの全く異なるものを比較して、いかなることが分かるのか、私にはすっきりとは分からなかった。例えば「宣ふ」などは、源氏物語が現代語より多いのは当然である。また、「いと」は現代語では文章語とされるが（語彙の残存度を調べるのならよいが）、「大変・とても」などと比較すべきかもしれない（造語からは別問題であるが）とも思う。むしろ、かかる語を省いて比較するならさらに興味がもてたかもしれない。そしてまた、源氏物語の語彙は、他の平安時代作品と異なった面もあるから（源氏物語のみの語などその典型。著者もその事実にはふれておられるが）、その辺ももう少し深入りしてほしかった。むしろ、源氏物語での複合語・派生語の本質にせまるようなものが求められる。むろん、これはその手掛かりになるものとしては意味がある。ただし、造語的に見てみようとしておられるが、現代語にあるか、続いて用いられているかに観点があるために、文法的求心性に欠ける。まとめとして「源氏物語での使用度数の高低とかかわりなく、語によって複合語・派生語が作られていることが分かった」「サ変動詞・連体詞・副詞・形容詞などは、源氏物語のみならず現代語でも複合語・派生語を作りにくい」「形容動詞・接続詞も複合語などが作りにくい」と結論される。逆にいえば、名詞・動詞に複合語・派生語が多いのであり、常識的な結論であるが、それを、このように丁寧に比較されて証明されたのである。

第十章　「『源氏物語』における仏教語――「宿世」とその周辺の語――」。これも文学の方面では既に論じられた語であるから、国語学でとりあげるなら、新しさが求められる。扱う資料が源氏物語のみでなく訓読資料などにも及んでいてさすがであるが、結論は文学の方々にはいささかものたりないであろう。「生霊・浄め」などは、

仏教語として挙げられるが、道教や神道なども関係するかもしれない。

第十一章「上代・中古の「愛」「恋」とその類義語」は宮地敦子氏の論[注3]なども引いてほしかった。次の第十二章の中世・近世、第十三章の明治期も同じ語である。丁寧に調べておられ、特に近世においては、氏のご専門でもあり、資料的にも後進者に調査法を教える役目もあると思う。この二章で、同じ語を時代順に考察することを試みておられ、さすがに各時代に通じておられる人でこそ出来るものであると思った。

第十四章「方言の語彙構造と語彙の性格――『岩手方言集』における「旧南部方言」を中心に――」においても共通語・古語との対比などにより旧南部方言の語彙の構造と性格を明らめようとされた。今までの論の方法を、方言でみてみられたのである。岩手方言は知らないが、方法的に興味深く拝読した。上方方言ならさらに有効な方法かもしれないと思いつつ。

第四～八章は、『日本霊異記』の訓釈にみられる和訓の性格について書かれている。この著書の量的にも最も多くを占め、著者の最も得意とされた分野であろう。私は訓読語には素人であるから、安易に批評はできないが、いろいろ教えられるところが少なくなかったので、このことだけでも本書を評価したい。平安時代のある語彙が訓読語か否かの研究は、実はまだあまり進んでいないのである。訓点資料に用例があっても、それが即ち訓読語とは限らない。今まで、「ひそかに―みそかに、たがひに―かたみに」など、訓読語と和語の対比はされているが、決まった語彙であって、個々の語彙については不明であった。[注4]私は古今集にある語彙で訓読語資料にもある語彙を調べたことがあるが、いちいちについて調べねば分からないのである。調べても明確でない場合が多いが、とにかくも、誰かが、それを明確にしてゆくしかないと思っていたので、本書はその手がかりとして有り難いものである。

3

第四章から第八章は、本書の中心となる部分で、『日本霊異記』と『新撰字鏡』の和訓についてである。築島裕氏と小泉道氏の指摘――『新撰字鏡』に『日本霊異記』の和訓の一部がそのまま取り入れられている――をうけて始まる。築島氏は、霊異記の語彙は、全体としては一般僧侶・俗人を教化するために講演する和語の一端であるとし、小泉氏は、和訓が本文に即して句の形で行われることが少なくないとする。

第四章　興福寺本『日本霊異記』巻上の訓釈の中、『新撰字鏡』と表出字が一致する和訓を中心に比較検討される。

音仮名も一致するもの12――鄙　止比止奈る、止比止　｝34
音仮名が異なるもの22――岐　知末太乎　知万太　｝
標出字は同一でも和訓が異なるもの20―粒　川比乎　阿良本

仮名に書き換えなどはありうるので、同じもの34例に対し、異なる例20で、『新撰字鏡』と一致する和訓の数が多いと、調査によって、確実にされた。また、標出字が異なるものの和訓が一致する

場合がある。これは、新撰字鏡が、他の資料を通じて和訓を収容したと考えられるものであるとされ、

　唼　波牟与利毛　喰　波牟

のごときが10例ほどあるとされた。これらは標出字の字義が一致するものが多く、新撰字鏡の編纂とかかわるかなど、問題提起もされた。また日本霊異記には古代語として注目すべきものが多く、語源研究に有用な語が存することも指摘された。そして、日本霊異記の全体の和訓調査や来迎院本の研究が求められ、同時に、日本霊異記の訓釈に用いられた和訓の性格・特色の検討が必要であるといわれる。

　このように、個々の語を見つつ、そこから引き出される問題提起もされ、今後の研究者に新たな道を与えられた。個々の語についても、和漢の辞書・訓点資料などを豊富に用いて検討されている。面倒な仕事であるが、すべき価値は大きいものである。

第五章　『日本霊異記』と『新撰字鏡』

　義注が一致するもの――覧　見也　見也

　意味が一致するもの――呈　顕也　示也見也

　和訓に対する義注

　　――御　乎左米太万比之　治也進也待也使也

これらから(中国伝来の字書について精査を要するが)、新撰字鏡の編者が日本霊異記の義注を摂取した可能性が考えられるとする。そして、今後の精細な調査を俟つといわれる。

第六章～第八章は、「『日本霊異記』(巻上)の訓釈にみられる和訓の性格」についてである。原栄一氏は、字音語が極めて少なく、一般の訓読語でなく和語もしくは上代語相当の訓があり、『日本書紀』の古訓のそれと一致するとし、築島氏は、一般の訓点本の和訓とは異なる面があるという。佐藤氏は、これらの示唆を具体的に考究された。例えば、前述例の「鄙　止比止奈る」の「トヒト」は、『続日本紀』『西大寺本金光明最勝王経』などにみえるが、中古の和文にみいだせない。「憩　伊己不己止」のイコフは、平安初期からの訓点資料に見るが和文にない。築島氏もいうように、和文ではヤスムである。「債　毛乃ゝ可比乎」「偉　大ゝ波之□」などは、モノノカヒヲ・タタハシロは古語的であり、訓読語であると調査された。「儻　カタチハフ　タムラ」も訓読語、「挫　トリヒダク、啄　ツキハム」も古語であるとされた。「宴嘿　比曾加尓之天」では、ヒソカニは訓読語でミソカニが和語として有名だが、訓読本や字書例をさらに加えられた。「髑髏　比止加之良」、新撰字鏡「髑　人頭」和名抄「顱　髑髏　俗云比止加之良」、色葉字類抄や観智院本類聚名義抄なども同じくヒトカシラ。要するに、平安時代には、和語のヒトカシラに対し、漢語のドクロが存在し、日本霊異記のは早い例であるとする。

　上代語で後代に続くもの。上代語で日本霊異記にあるが、後代の辞書にしかないものは古語であろう。また和訓の中で漢文訓読語と考えられるものもある(「鄙　止比止奈る」)。日本霊異記の和訓を多面的に調査する必要があるという。

　さらに、和訓の中で、新撰字鏡に見いださないものも50余例あ

る。「騰　安可利天」などは万葉集以降、平安時代に和文・漢文訓読文にも用いられた。「肯　阿へ天」は万葉集にもあるが訓読資料にあり、訓読語と思われる。「當頭　川ゝ女支天」、字類抄・名義抄・今昔物語にもある。

このように、日本霊異記巻上の和訓には、和文語が多いが、漢文訓読語も少なからずあることを、語に具体的に当たって指摘された。即ち、従来の説を踏まえつつ、さらなる領域を提示され、今後の研究者に問題とその方法を含めて指示されたのである。個々の語については、清濁の問題やまだ追究の足りないものもあるが、それも今後の研究に道を開くためであろう。さらに、困難はあるが辞書同士の影響関係や、訓読文同士の影響関係なども今後の調査対象となると思う。私もこの著書によって、和語やその中でも歌語といった、特殊な分野の語彙について、逆に示唆を受けたことを書いておかねばならない。

注1　清水好子「物語の文体」(『国語・国文』昭和二四年九月)、橋本四郎「古代語の指示体系」(『国語国文』昭和四一年六月)

注2　命名のみならず、「夕まぐれほのかに花の色を見てけさは霞の立ちぞわづらふ」(源氏物語・若紫)という光源氏の歌は、若紫を花にたとえている。

注3　宮地敦子「『愛す』考」(『国語国文』昭和四一年六月)

注4　築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』(東京大学出版会)などには指摘がある。

(一九九九年五月二五日発行　おうふう刊　A5判　四〇〇頁　本体価格二八〇〇〇円)

――光華女子大学教授――

(二〇〇〇年八月三〇日　受理)